




横山工業所
50年の歩み

 株式会社 横山



企業理念

私たちは、『住まい』という夢造りのお手伝いをさせて頂いています。
仕事を頂けたことに感謝し、感動をお返しします。



経営方針

夢

私の夢、家族の夢、仲間の夢、お客様の夢、社会の夢実現のために。
『夢しか実現しないから、夢を追い続ける。』

縁

縁あって共に働く仲間(社員)の成長と幸せのために。
『運命共同体である仲間(社員)の家族も含め、
皆が人として一歩一歩成長し続けることが、幸せな人生である。』

志

私たちは、お客様に笑顔で幸せな生活を約束する
ライフラインを創るため、志をひとつにする。
『想像してみましょう、私たちの創った環境で
お客様が笑顔いっぱい生活されている姿を
そのために私たちは一丸となって良い物を造り上げなければならない。』

自立

ゆえに、私たちは自ら考え自ら行動します。
『なぜならば、行動こそが人を成長させ、
お客様に感動を届ける事ができるから。』

広島で、街づくりとともに歩んだ50年

株式会社横山工業所の創業50周年にあたり、
これまで私どもをご支援くださった皆様に、心より御
礼申し上げます。

創業者である私の父、横山静香が会社を興した
時代は、日本が高度経済成長の真ただ中にあり、
広島もまた、戦争の傷跡から力強く復興の歩み
を進めている時代でした。以来、広島も西日本有数
の都市に変貌を遂げ現在に至りますが、創業以来、
その街づくりの一部に貢献出来ていることに、社員
一同幸せを感じております。

当社の経営理念は、「お客様の笑顔のために」。
完成した建物をお客様にお渡しする際、当社の社
員はお客様と直接お会いする機会をいただきます。

そして、お客様の笑顔に接したとき、私たちは、
心の底から苦勞が報われたと感じるのです。この喜
びは、仕事と真剣に向き合った者だけが受け取るこ

とのできる宝物であり、この理念を、世代を超えて
共有できることが、私たちの誇りです。

企業の本分は「継続」にあり、いつの時代もお客
様に信頼される仕事をお届けし続けることが使命と考
えます。50周年は、確かに大きな節目であり、喜ば
しいことですが、敢えて、単なる通過点に過ぎない
のだと社員が思いを新たに、自分たちを見つめ直
すタイミングと捉えています。

言うまでもなく、この業界の仕事は私たちの力だけ
で成り立つことはあり得ません。これから先の10年、
30年、50年と、当社が歴史を刻むには、苦勞を共
にし、喜び合う社員や、横山工業所に関わっていた
だくすべての方のお力添えが必要です。この節目の
年に、皆様に対する感謝の思いをお伝えし、これ
からも共に歩んでいただけますようお願いを込め、
この記念誌を製作しました。



代表取締役社長 横山 典玄

横山工業所50年の歩み

1965
昭和40年10月
個人創業



創業当時の現場風景
写真中央が創業者

1969
昭和44年11月
法人組織変更
横山静香 代表取締役社長就任



入社当時の現社長
社員旅行にて

1971
昭和46年4月
寺岡雄 入社



1970年
大阪万国博覧会



1986年～1991年
バブル景気

1988
昭和63年3月
株式会社に組織変更



1990
平成2年3月
新社屋完成
平成2年11月
寺岡雄
代表取締役社長就任

1985
昭和60年4月
横山典玄 入社
昭和60年
自社社屋完成



1991 平成3年
安全協力会「横友会」設立
懇親会で挨拶する創業者



1991年～1993年
バブル崩壊

1992 平成4年
横友会による安全パトロール



2000
平成12年11月
横山典玄 取締役就任

2003
平成15年7月
横山時子 取締役他界

2007
平成19年10月
寺岡雄
代表取締役社長退任



2008年
リーマンショック

2010
平成22年11月
横山典玄 代表取締役社長就任

2011
平成23年10月
寺岡雄 会長退職

2012
平成24年12月
横山静香 相談役他界

2019
令和元年
株式会社横山工業所
創業50周年



社員の親睦を深める
社員旅行を毎年実施

創業者の思いを継承し、新たな時代へ 経営者という名の開拓者でありたい

代表取締役社長 横山 典玄



頑固一徹、創業者の思い

創業者である私の父は、本郷町（現・三原市）出身で5男1女の四男として生まれました。やがて学徒動員により、呉の海軍工廠で、船内の配管設備を造る仕事を体験します。決して裕福でない家庭の事情では進学も叶わず、働くことしか選択肢はなかったと言います。広島に出てきて何をしようかと考えていた頃、荒廃した広島の街の中で、汗まみれの職人さんたちが水の供給に尽くす姿を見て「これは自分にもできる仕事だ」と思ったそうです。これが、横山工業所の原点です。

なぜ、このように人伝えに聞いた話のように振り返るのかと言いますと、昭和一桁世代の父は厳しい人でしたし、自分から昔のことを話すタイプでもなく、訊けば怒られそうな気がして、親子ながら敢えて触れないうえからです。

何より創業者として思い出すのは、自分のことは二

の次で業界のために尽くした人だったということです。創業者と時代をともにされた先輩方の話をうかがうと、「あなたのお父さんは、自分のことはさておいて、業界のことを一番に考える人だった」と話していただけます。一人の経営者としての立場を考えれば、業界のために尽くす一方、自身に利益を享受しようとするところですが、それを一切せず、業界のためだけに動き続けました。自身が表に出ることも派手なことも嫌がる、不思議な感じの人でした。

社長としての父は、それは厳しかったと言います。自ら職人の育成に取り組み、朝から実技を教え、午後は座学。当然、怒るしゲンコツもある時代でしたから、教わる皆さんも大変な思いをされたでしょう。ただ、当時父の指導を受けた人からは「あんなに真剣に怒られたのは、おやっさんだけだったなあ」と話していただけます。当時のオーナー社長が、従業員にとって「おやじ」だった時代です。

厳しい修業時代に見えたもの

私自身は、父が社長の時代に23歳で横山工業所に入りました。自動車整備の専門学校を経て、広島のカーディーラーに勤めていた頃、二代目の社長となる寺岡雄さんが私を訪ねて来て「そろそろ帰って来るべきじゃないか」と。

入社してからは仕事を一から覚えなければいけません。「教わる」というよりは「見て習え」の時代ですから、まずはこの仕事に不可欠な「積算」とは何ぞや?から

始まって、独学で勉強を重ねました。身内の後継者というのは、人より2倍やって当たり前で、3倍やってやっと認められるのが常識でしたから徹夜するのは当たり前。入社後4~5年が、振り返ってみて最もつらい時期でした。自分を限界まで追いつめていましたから。

そんな経験から学んだのは「自分には限界がある」こと。「限界です、助けてください」と頼っていけるのが会社という組織です。そして会社は、自分だけで解決できないことを助けてくれるわけです。そこで『組織』というものの重要性を強く感じました。自分のプライドを一旦はポロポロにすることなのですが、そんな経験があったからこそ、気付くことができたのでしょう。

二代目社長の寺岡雄さんの時代は、新規のお客様を開拓しながら、旧知のお客様ともバランスをとって業績を伸ばしていきました。創業者イズムを継承しながら、マンションに着目し、仕事をシフトしていった時代です。

とはいえ、はじめは利益が出ませんし、そもそもマンションは「クレーム産業」と呼ばれ、誰もやりたがらない仕事です。小さな傷、水漏れが一つあっても許されません。そのなかで我々も失敗を繰り返しながらノウハウを積み重ね、技術を編み出していった…そんな時代でした。

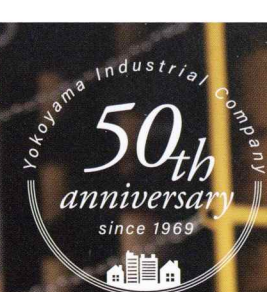
会社と業界の発展を見据える

2010年、私が社長に就任してから行動に移したのは、部門ごとの人間が自分たちで積極的に動いて仕事をする体制 - 本来の組織づくりです。それを構築したうえで、ビジョンと方針を経営サイドが打ち出し、時代に合った新規の事業を考えていく会社運営を模索しています。

私は、道なき道を切り開いていくのが社長の仕事であり、経営者の本分だと考えています。社員自身が問題解決していけるよう、彼らを信頼して、我慢するところは我慢し、任せて失敗させて、そして成長させていくという考え方を定着させていくために、毎日が、試行錯誤の連続です。

そして、これからは当社の未来に残さなければいけないものを考えると同時に、業界全体のことも考えて

INTERVIEW 01
第三代 横山工業所社長



いかなければならないと思っています。いろんな業界でも、人材、後継者不足など、同様の悩みを抱えていますが、将来について悲観的な見方をされる経営者が多いのが実情です。業界の未来を明るくものにするためには、若い人たちが希望をもって入って来られるような環境を作ることが必要です。問題解決の突破口はいきなり開かれるものではありませんから、まずは当社で実践し、やがては業界全体のための仕組み作りができればと思っています。



創業者と仲間と 新分野へのチャレンジ 堅実経営を支えてきたもの

第二代 代表取締役社長
寺岡 雄

電気メーカー勤務時代、創業者・横山静香と出会い横山工業所に転職。営業で力を発揮し、取引先の新規開拓を進め事業を拡大。1990年に代表取締役に就任。2007年から2011年まで会長職を務めた。

ことから始まったご縁です。

私が25歳の頃、当時勤めていた会社を辞めて独立を考え始めたとき、まずはいろんなことに精通している横山さんのもとで何年間か修行して学びたいと思ったんです。空調のことは勉強して来ましたが、水道のことは素人ですから、5年ほど教えてもらうつもりで、退社と同時に「弟子入りさせてください」とお願いし、入社に至りました。一緒に仕事をしている期間があったので、仕事のやり方は知っているつもりでしたが、いざ働くとすると、施工に使用するパイプの径ひとつとっても、計算上きっちり裏付けされていなければならないことを知りました。その時代は、自分で設計図を書いたら自分で施工する体制でないと、建設会社とお付き合いいただけませんでしたから、一からの勉強が始まりました。

空調設備に関しては、私の方が経験値は高いと思っていましたが、その後半年ぐらいの間に横山さんは独学で勉

強されましたね、私がびっくりするぐらいのことを質問されるんです。本を買ったりして知識を身に付けられたんですね。私が逆にアドバイスをもらうぐらいになるのに、時間はかかりませんでした。頭のいい方で、知識や技術を身に付けるのに妥協しない人でしたね。

私が営業を担当するようになって、高校時代の同級生の紹介で設計事務所などを紹介してもらう機会があり、「おまえがやるのなら、うちの図面もぜんぶ手伝ってほしい」という話を持ち上がり、建築会社に紹介してもらえるようになりました。そうやって仕事が増え始めた頃、友が友を呼ぶというのでしょうか、私の同級生たちが入社してくるようになったわけです。彼らとは以降、横山工業所の仲間として汗を流すことになります。身内として思いを一つにやってきました。期間限定で働き、独立の青写真を描いていた私の構想は、この仲間たちの存在で、消えてなくなりました。

二代目社長として挑んだ 未知の分野

この会社で働き続けることを決意して間もなく、横山さんが「わしは60歳になったら社長を退くから、寺岡君やってくれんか」と言うんです。そこで私は条件を出しました。「典玄君（現社長）が将来の後継者としてこの会社に入ってくるなら、引き受けましょう。だけど、息子が帰っても来ないような会社だったら、社長一代で諦めてください。その時は自分も独立しますから」と。それで、典玄君に「帰るか帰らないかはっきり返答をくれないか」と、気持ちを確かめに行きました。彼にも、いずれは父の会社で働きたいとの思いがあったので、将来の後継者として入社したのです。

やがて、ハコモノ行政の大型事業が終焉を迎え、建設業界に勢いがなくなり始めた頃、知り合いの設計事務所が、マンションの設計を手掛け始めます。不動産業を営む同級生も「これからは広島もマンションブームになる。マンション専門でやれ」とアドバイスをくれました。しかし、マンションという集合住宅は、50世帯だろうが100世帯だろうが、一つ

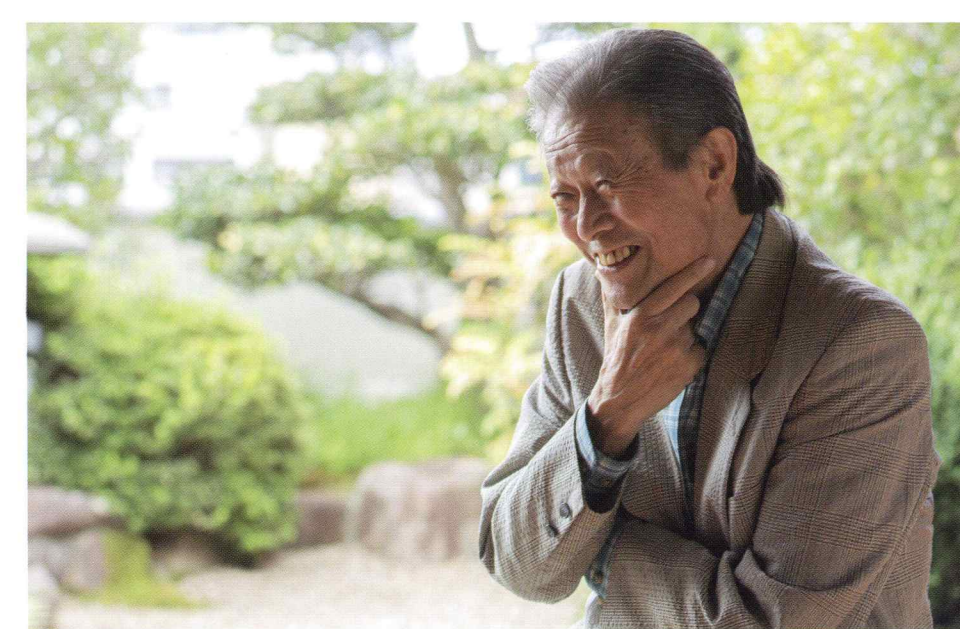
の部屋の施工を失敗したら、建物の配管すべてを直さなければいけないリスクを背負うことになります。さらに、コストが低く、誰も手を出そうとしない分野でした。

横山さんは豪気な反面、石橋を叩いて渡る慎重派でもありましたから、懸命に説得し、GOサインが出されました。こうして、マンションに特化した仕事に移行するものの、当初は同業の方からも「横山は大丈夫か」と心配されたものです。しかし、マンションが次々に建てられる時代になると、この分野にいち早く乗り出した横山工業所の名前は、業界に知れ渡っていました。それまでお付き合いのなかった会社からも見積りを依頼され

るようになり、仕事はどんどん増えていきましたから、これは会社にとって大きな転換期だったと言えます。そしてもう一つ、この50年間、横山工業所が時代のさまざまな波を乗り越えられたのは、バブル時代に従業員を増やさず、自分たちのできる範囲で堅実に仕事を積み重ねた結果です。世の中が好景気に浮かれたあの時代、売り上げは伸びませんでした。バブル崩壊後に慌てることもなく、かえってそこから業績を伸ばしていくことになるんです。

未来を担うリーダーへ

これからの横山工業所を導く社長には、常に参謀役の社員と意見を交わしながら事業を進めていくことを望みます。創業者と私の時代、会社を堅実に運営できたのは、二人がお互いに牽制しあっていたからだと思うんです。私が「こうやりたい」と思うときに、先代は「いやいや、それはいかん」とプレーキを掛けられることもありましたが、その逆もありで、正しい路線を冷静に導き出す過程を踏んでいきました。仕事の形が変わっていても、横山工業所の良いところを、ぜひ継承していただきたいと思っています。



創業者 横山静香氏との 出会い

創業者、横山静香さんとの出会いは、私が冷暖房関連の会社にいた頃、仕事を通してでした。ある会社の社長さんに、「横山さんのところと一緒に仕事をやってくれないか」という話をいただいた

がむしゃらに働いたあの時代 縁あって、わしら揃うたんよね。



永岡 治利

設備設計事務所を創業し、設計業務を請け負う。高校の同級生だった第二代社長・寺岡雄の誘いで横山工業所に入社。設計・施工管理全般に携わる。

永岡 この4人が横山工業所の仕事で一緒になるんは、寺さん（第二代社長 寺岡雄）との関りからなんよね。要は、宮工（宮島工業高校）つながり。

野登木 同級生とはいえ、高校では電気科と機械科で一緒じゃないから、人に紹介されるまでは知らん間柄じゃったんよ。会ってみて初めて同級生かと。野球部で、わし3カ月だけおったんじゃけど、寺岡君は1、2カ月で辞めたらしいから、そこもすれ違い。それでも同じ会社に引かれるというのは不思議な縁よ。何でか知らんうちに同級生が集まって、この会社がうまいこと動き出した。

永岡 年は同じではあったけど、寺さんはとにかくカリスマ性のある男よね。寺さんが二代目社長になってから仕事量も増えたから、忙しさは以前を越えるようになった。

中倉 まあ寺さんは、人の使い方が上手かった。文

句言うても、するっとかわされるし。

井上 わしらは協力会社の立場だったのでね、名前を呼び捨てにする時は同級生として、「さん」が付くと仕事での関係という具合に分かれとったよ。人を呼び寄せる力を持つとる。

中倉 わしらが横山工業所入った頃は、創業者の横山静香さんが社長の時代。今でこそ土日の週休二日が当たり前の世の中じゃけど、その当時は日曜日の休みが月に2回だけで。



野登木 照男

建築設備会社で施工管理を務め、縁あって横山工業所に入社。寺岡雄の同級生でもあり、1988年まで施工管理の第一線として勤務した。

野登木 当時は意識的にカレンダーを見ようにしたよ。カレンダー自体は見るんじゃけど、日曜祭日の赤い色の日は、敢えて目をそらしてのう。自分から休みを欲しいとは誰も口にせんし、寺岡君が「おう休むか」と言った時に休むくらいで。決まった休みを取るようになったのは『子どもの日』。この日だけは交代で休

もうか、って話になって。あれが初めてじゃないか。

中倉 だから予約してどっか行けるようになった。

永岡 当時の横山工業所はプレハブ3階建てで、社員は20人おるかおらんぐらの規模で…

野登木 ほんまよのう。

永岡 それ以前が木造の借家で…あそこで10人ぐらいいかな。



中倉 幸夫

建設設備会社で配管工事を努め、高校の同級生だった寺岡雄の誘いで横山工業所に入社。2011年まで工務部の部長として多くの職方をまとめた。

中倉 まあしかし、あの当時は、夜の10時ごろ仕事場から帰って来ても、事務所の中には翌朝の4時から5時まで誰かいる。電話はどんどんかかって来よるしね…ここの会社なんじゃろうか?!って驚いたよ。

永岡 はははは、今で言えばいわゆる『ブラック企業』よ。あの当時は、仕事が多岐に渡ってあったし。工場あり、病院ありテナントビルありね。初代社長の時代は確かにハードじゃった。

中倉 いやあ、社長が怖かったからね。

野登木 それは見方の問題。社長は口が立つ人じゃったから、あの人の前に来たらまっすぐ物を言える人がおらんかったということよ。

永岡 大目玉をくらった思い出もあるよ。自分が立場的にそういうところを任されていたのもあるとは思うけど。2度ほどこっぴどく叱られるのが続いて、その晩に退職届を書いて翌日提出したら、「ああ、言うてくるじゃろうと思うとった。まあそう言うなや。わしは腹の中は白いんじゃけえ」。ハイ、それで終わり。

井上 わしは寺さんに聞いたが「お前だけぞ、社長が君付けで呼ぶんは」って。協力会社の立場だからかもしれないが、たまに名指して呼ばれて行くと「コーヒーの出前取れ」って。ああ、また愚痴聞かされるんかって、そこから始まる。あの頃は、ここ（横山工業所）に、下請けやら何やら込みで総勢100人近くおったと思うけど「それで1年間がんばって純益100万円も無いんぞ〜」って。意見求められても困るよね、わしも。何でそういう風に声を掛けてもらえたのかというと、たぶ

んね、社内旅行に呼ばれたりして行った時に、話が合ったからだと思う。歴史とか、興味持つものが似ていたというか。それで議論を交わすのが好きな人だったからね。

永岡 勉強家じゃったよ。



井上 龍美

旧 井上管工代表。配管工事業として数多くの建築工事に携わる。1999年まで横山工業所の専属として協力関係にあった。

井上 本棚が自慢じゃったろう?くるくる回るものなんじゃけど、今もあるのかな?その自慢の本棚にびっしり本があったよ。

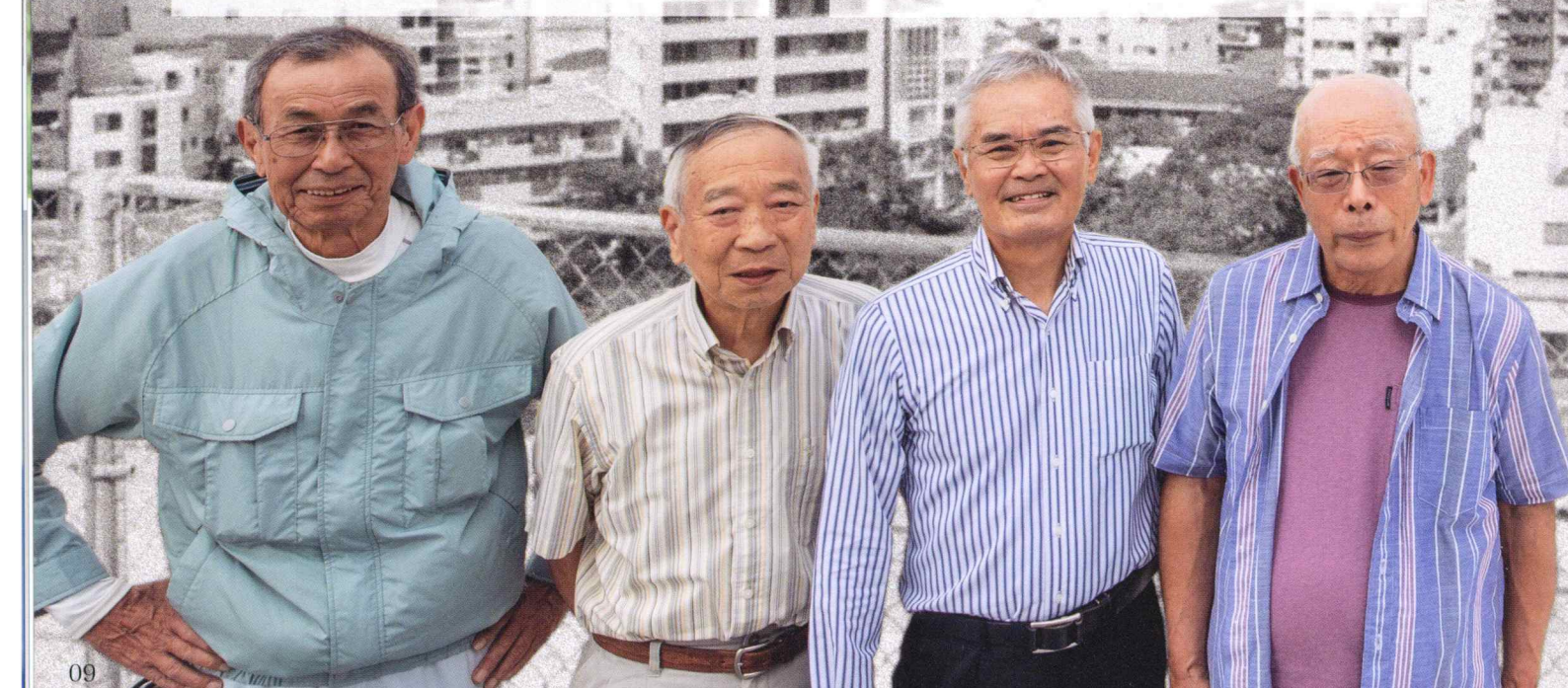
中倉 会長（静香氏）は、職人に対してはきつく接することはなかったな。自身が職人からスタートしたのもあるんじゃろうけど。ただ、一回怒ったらもう、半日かかったな。わしのことじゃなくても、例えば誰かが交通事故したとするじゃない?そうしたら、あれが言わんかったと怒り始めて、そこからは止められん。どんどん怒りに火がついていって「ああ、これはもう半日ダメじゃ」と諦めるしかなかったよ。

野登木 働き始めた頃は、年間工事高が2億から2億5千万くらい。わしが辞める前には10億いったはず。

永岡 10億いったんかな?

野登木 うん、その線上ギリギリ。ある程度、広島市内の設備業者で上の方に入った時代よね。わしが会社を辞めた後、横山工業所はマンション事業に特化するようになったんよ。

永岡 わしは現在もこの会社におるからこれまでの横山工業所をいちばん長く見とるけど、ずいぶん変わったよ。このメンバーと一緒にやりよる頃は、各工務店が横山工業所の中で、自分のやり方で業務をするという時代だったのが、今は社長が色々なプロジェクトを組んで、全員で一つの所を目指そうという形で仕事を進めるようになってね。やっぱり現社長も、寺さんのカリスマ的なところを持ち合わせている。今は、マンションに特化してやるとるけど、やがてそこも頭打ちの時期は来るじゃろうから、先をにらんだ事業の多様化を始めてもらおうといいなと思います。





INTERVIEW 04

横山工業所 協力会社

現場で生きるのは「人」の力。 合理化が進んでも変わらない。



小島 広島は街もこの50年でずいぶ変わったけど、さすがに私たちも広島が焼野原になった時代は知らないわけだね。我々がこの仕事に関わり始めたのは、そのもつ後の話で。

青木 街が復興して、まあまあになる頃よね。

小島 だからと言って、食べるものがそんなあったわけでもないから、誰もが生活することで精一杯。そんな時代でしたね。あの当時創業した会社で、今40年50年と頑張っている会社はすごく多

いんですよ、広島は特にね。うちの会社も40年を迎えました。同じ頃に創業した会社というのは大体、社長自身が現場の職人さんからスタートしてね。そこから従業員を少しずつ増やして成長しているんですけど、当時は人手が足りなかったのに、仕事は嫌というほどあったから、ほとんど寝ずにやっていたものです。

青木 そうそう。とても今の「働き方改革」だとか言ってる場合じゃなかった。私らも3カ月休みが無いっていうのがほとんどだった。それでも当時は、競うように



旧 有限会社いくみ設備 代表取締役社長
青木 靖法
建築設備配管工事業者として個人操業の後いくみ設備を創業。2011年まで横山工業所との協力関係にあった。

「働き方改革」なんて言葉の無い時代
誰もが寝る間を惜しんで働いた



仕事したから、正月でも2日からはもう現場に出て行ったね。

小島 休むなんて考えもしなかった。

青木 仕事はたくさんあるのに、働き手が足りない状態だね。1日24時間仕事をしなければ追いつかない。8時間で割ったら3交代になるんですけど、ということは3交代でまわせるぐらい人手があつてやっと成り立つということ。今思えば危なくて仕方ないけど、もう、車を運転しながら寝てしまうほどでしたよ。で、朝がた家にたどり着いたら風呂に入って着替えて、食事をとってまた仕事に向かう。そんな毎日だったね。

小島 ちょっとどこかに停まって仮眠をとったりとか、そういうレベルで、とにかく誰もがもう働きっぱなしでしたよ。

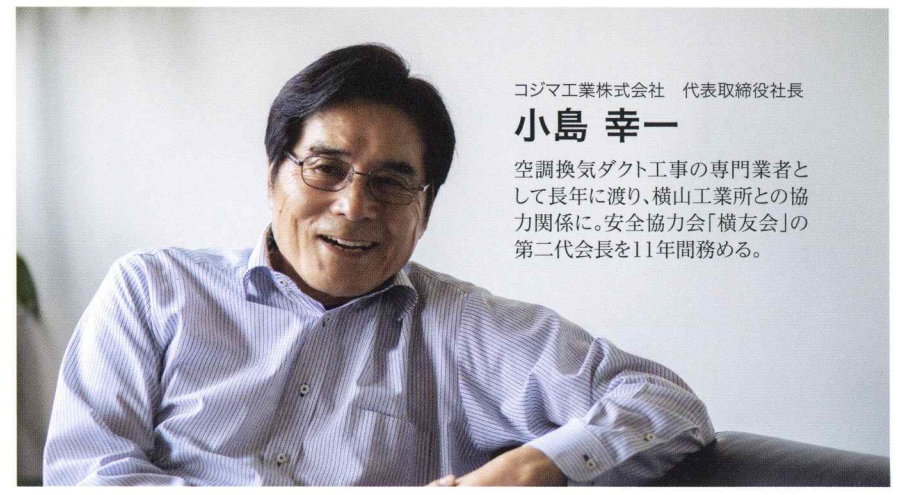
青木 そうよね。深夜10時や11時が定時みたいなものと考えて、毎日仕事したもんねえ。たまに夕方の6時や7時に仕事済ませて帰る日があったら「どうしたん?今日は」と不思議がられたりしてね。

小島 私たち下請けは、横山工業所さんをはじめ、何件も現場を掛け持ちしてましたから、毎日のように仕事の依頼が入って来るわけです、一斉にね。「その件はちょっと待ってください」って、順

番に案件を整理させてもらってから予定を組むわけですよ。だから、どういう風に仕事の時間を設定するかというと、建築屋さんが現場から帰った後。気兼ねしなくてもいいし、もう時間なんて関係なしでね。

青木 私は、創業者の横山静香さんが社長の時代からのお付き合いになるけど私としては、配管を1m伸ばしていくらという商売だから、とにかくもう一生懸命でね。この現場をこなして次の現場へと、そういう感じでしたよ。

小島 設備業界自体はね、電気も空調もそれぞれの分野が建物に不可欠な



コジマ工業株式会社 代表取締役社長
小島 幸一
空調換気ダクト工事の専門業者として長年に渡り、横山工業所との協力関係に。安全協力会「横友会」の第二代会長を11年間務める。

大きく変わった職場環境下でも不変なもの
私たちの仕事はロボットにはできない

ものだから、この先も残ると思います。

青木 今でもどんどん新しい建物が建ってますからね。時代とともに技術は進むから仕事の効率はどんどん向上するわけですよ。そういう面ではいい時代になった。昔みたいに1m2m計って切って繋いで…みたいな作業工程は要らなくなって、ほぼ出来上がったものを繋げば終わりですから。言い換えれば、職人の経験や腕（技術）が、昔ほど求められなくなったということですよ。

小島 私はダクト専門なので業種は違うんだけど、現場での仕事を見ているとやっぱり材料そのものが確実に変わってきていますよね。配管の材料がもう全然変わっている。この流れは、お互いが上手いくようにという考えのもとで生まれたもの。それに合わせて、現場の姿は変わってきた。でも問題なのは、管工事にしても、うちのような板金にしても、1級の資格を取得するための施工のやり方が、昔と何ら変わっていないことなんです。現場はどんどん変わっているのにね。

青木 本当にそう。矛盾してますよ。

小島 試験で求められるやり方が、今の現場では使えないですからね。それ

なのに、資格取得のためには身につけないといけない。良いものができるのは結構だけど、技術が必要ではない時代になったということでしょうね。今の時代は、ロボットだのAI（人工知能）って、盛んに人の働く場が奪われるようなことを耳にしますが、はっきり言って現場の仕事というのは、ロボットにはできないですよ。人間じゃないとね。でも、人間がやる仕事にも限界がある。

青木 知れてますよね、人間にできることは。こればかりは人の手が入らないと進まない業界なんで、無くなることはないにしても、この先大きく発展するかといえば難しいかも知れませんね。

小島 でも、設計の現場は本当に変わりましたよ。

青木 本当にねえ。図面も手で描いていた時代の者からすると、もう何がなにやらさっぱりで。

小島 働く時間も、世の流れで激変しましたね。8時間労働、ノー残業、週休2日…働く者を守る観点からすればもちろん良いことなんですけど、我々の時代は考えもしなかった。その点だけでも、この50年というのは隔世の感がありますね。



INTERVIEW 05
横山工業所 協力会社

横山工業所との出会いに感謝。 次の50年に向け更なる発展を願う。

変わりゆく時代を見てきた

岡寄 我々が横山工業所の仕事をするようになったのは、二代目社長の寺岡さんの時代。創業者の横山静香さんが会長でね。今思い返してみると、昔の職人さんは、いかつい人が多くてね。僕自身が若かったのもあるけど、初めて忘年会に呼ばれた時「とんでもない席にきてしまった」って、怖かったのを覚えるよ。



有限会社田中設備工業 代表取締役

田中 利文

電気設備工事会社で現場経験を積み独立。空調冷媒工事において横山工業所と長年にわたり協力関係を築いている。

堀 基本的に、体育会系の人が多かった時代よね。

岡寄 寺岡さんが、僕ら一人ひとりにもお酌をしてくださるから恐縮して、ずっと正座したままでね。緊張してましたよ。

堀 会長だった横山静香さんは、すごく顔の広い人でね。そうした集まりに参加する人たちの顔ぶれも多彩だった。人を惹きつける何かを持った人だったんじゃないかな。景気が良くない時代だったかな、ある年の忘年会の挨拶で「うちの仕事が気に入らなければやめてもらって結構」って言われてね。それを真に受けて、本当に何か離れたんですよ。そうしたら翌年には「横山工業所をどうぞよろしく！」って180度の転換。



堀設備 代表

堀 真一郎

建設設備配管工事業の社員として現場経験後、個人創業。横山工業所の専属として協力関係にある。

言葉のどこを探しても謝るわけではないんですよ。でも、このあたりの加減が、人の心を掴む上手さだったのかなと思いますね。

岡寄 その時代から現社長の時代も

見てきたけど、会社の雰囲気は随分変わりましたよね。社長の方針で、若い人をどんどん採用するようになりましたから。そこは大きい。この業界を担う人材を育てたいという思いに、社員さんが応えないとね。

田中 じゃあ、我々職人の世界はどうかという、明らかにその世代が減ってきている感じがするね。

堀 やはり、技術を身に付けるまでにどうしても時間が必要なのと、週休二日の世間と比べて休みが少ないから、やりたがらないのが実情かな。大手に入った現場監督さんにしても、わずかな期間で辞めていく人は多いからね。どうしても、他人との境遇の違いに不満を持ってしまうのかな。

田中 現場仕事の知識を持つておくことは大事ですけど、昔と今では仕事のやり方が違いますからね。今の仕事は「組み立てる」こと。良い道具と知識でやっていける時代ですよ。

岡寄 昔は、鉛管を曲げたりハンダづけしたり、それこそが職人の仕事だったからね。

田中 空調の仕事は、現場での経験を3年ぐらい積めば、家庭用のエアコン設置ぐらいはできるようになるから、独立立ちしていく人が多い世界ですよ。

感謝の気持ち。そして…

田中 創業者の時代の規模から考えれば、ここまでの会社になって、マンション設備の分野でトップを争う横山さんですけど、僕が独立して以来、ずっと仕事を一緒にさせてもらっていることに、まず感謝の気持ちしかないですよ。この先、横山社長には、社員さんや我々含めて、みんなを取り巻く仕事の環境が、良い方向へ向かって行けるような会社



岡崎設備 代表

岡崎 弘幸

建築設備配管工事業の社員として現場経験後、個人創業。横山工業所の専属として協力関係にある。

づくりをお願いしたいですね。一生懸命ついて行きますよ。

堀 僕は今年、50歳になったけど、考えてみれば、まさに自分が生まれた年からずっとこの会社があるというのは、すごいこと。独立してから25年になるから、人生のちょうど半分を、仕事だけにとどまらずいろんな人付き合いまで、この会社と関わらせてもらってきた。もう「感謝」の気持ち、本当にそれだけ。これから先もよろしくお願いします。あと…もう少し、代金が上がればね、100点満点ということで（笑）。

岡寄 僕は、前の会社を辞めた後、どうしようか目的も持たずいた頃に、横山静香さんに声をかけてもらったから今があるわけだね。その恩に報いようの思いひとつで仕事をしてきたわけですよ。これからの横山工業所さんをお願いすることがあるとしたら、「横山」というブランド力を持ち続けていただくことと、さらに、その価値をもっと上げていってほしいということですかね。担い手が少なくなっている時代とは言え、職人は、ブランド力

を持っている会社のもとに集まってくると思うんですよ、間違いなく。あとは…やっぱり代金がもう少し上がれば、120点よね（笑）。誤解のないように言っておくと、実際は何年か前にアップしてもらったけど、そこに満足していない自分たちがいるという…。

田中 人間、欲を口にしたらキリがないですよ（笑）。

田中 私は、この中では一番長く横山工業所さんと関わらせていただいていた。私の会社が、マンションの仕事を重点的にさせていただくようになったのは、横山工業所さんのおかげですよ。空調の分野なので、なかなかこの場に居る皆さんと顔を合わせる機会はないんですけど、常に連絡を取り合って、仲良く仕事をさせてもらうことにも感謝です。この50周年、本当におめでとうございませう。ここを大きな節目として、横山社長には、どんどん大きな仕事を獲ってきていただきたいですね。それが直接、私たちの生活にも繋がっていきま



AGS 代表

町田 禅

建築熱絶縁業の技能を習得後、個人創業。空調換気ダクト、空調冷媒工事も手掛け、多くの現場で協力関係にある。

創業者の思いをつなぐ、
次の50年へ
業界の未来を語ろう



大方 了介 (写真右)
株式会社大方工業所
代表取締役社長を経て現在は会長職を務める

山本 睦美 (写真左)
山本設備工業株式会社
代表取締役社長を経て現在は会長職を務める



横山 お二人には、私の父の時代から、本当にお世話になりありがとうございます。当社も、私の代で創業50年を迎えることができました。せっかくの機会をいただきましたので、父の時代のお話や、私たちの業界が今後、どう歩むべきか、お二人のご意見を聞かせてください。

山本 横さん(横山静香氏)と初めて会ったのは、昭和43年頃かね。何でも一人でこなす人で、計算機も使わず黙々とそろばんで積算しとる姿が印象的だったね。豪快で気性も荒い一面はあったが、そういう自分を取り繕うことのない人だった。組合の運営にしても手腕を存分に発揮して、組織を動かす才覚を持った人という印象があるね。

大方 私は、横山さんと知り合ったのが山本さんの少し後ですけど、立案から段取り、実行と、抜群の行動力を持った人でしたね。言い訳など一切せず、組合を束ねながらも、我田引水は絶対しない、良い意味で頑固な人でしたよ。

横山 配管工事の世界にもそれぞれ得意分野があって、私どもはその点で競合しませんでしたから、長くお付き合いいただけているのでしょうね。当社は3代目の私で50年を迎えることができましたが、この先の何十年を見据えると、決して平坦な道ではないという声をよく聞きます。お二人の考えはいかがですか？

大方 技術革新によってAIがどんな業

種でも入ってくる時代が到来すると言われるが、我々の仕事は、それでは片付けられないですよ。大切な現場は「人」でないと任せられない。将来的に、どうやって確かな技術をもった職人さんを確保していくかというのは、私たち全員にとって避けられない問題だと思いますしね、それができない会社は行き詰まる可能性もありますよ。ただ、給排水や空調の仕事というのは、建設の世界で、欠かせないものですから、業界の皆さんが同じように考えていかなければいけません。将来への一番の弱点はそこ、人材の確保ですね。

横山 建築業界の現場はなかなか難し



いですよね。私は、これからは大学卒の人でも現場を担う人材を育てていける形、つまり、新しい職人像というものを作っていかねばと思うんです。技術を身に付けた人には、より高い報酬を支払えるようなリクルートをすべきだと思いますし、そういう形を進めています。とにかく、こちら側を一旦向いてもらわなければ、その魅力を伝えることもできませんから。我々の仕事が、世の中のために大切なものなんだということを、社会も認めるようにならなければ成り立っていきませんよね。

山本 私たちの業界自体、戦後から続いてきた同業者の会社がどんどん無くなっている。後継者に引き継いでも上手くまわらないということだね。

大方 確かに現実問題として、業界全体では事業そのものを継承する人がどんどん少なくなるのかなという懸念はありますね。

横山 私がこの先何年できるかわかりませんが、今年を新たなスタート地点だと位置づけ、精進します。

山本 親父さんが創ってここまで息子が守ってきた会社だから、まずはこれからも、全力をあげて守り続けること。売上だけを追い求めるのが決していいとは思わない。一番望ましいのは「持続」ですよ。横山さんに続く、後継者を育てるということ視野に入れて、この先取り組んでほしいね。

大方 昔から「無事、これ名馬」という言葉があるように、まさに経営も本質はそこだと思うんですよ。いくら我々が頑張っても、それはもうきりが無い話だね。どこまで行けば安心かという尺度が、経営者にはないですから。やっぱり、自分の背丈に合ったもので、これなら間違いないと確信できる路線でやっていくのがベストだと思います。横山工業所さんの評価は、業界ですごく高い。『マンションなら横山だ』ってね。ですから、仕事量を増やそうと思えばできるだろうけど、そこは経営者として舵をとってほしい。



人材育成と海外進出



働く人こそ企業の財産

頑固一徹、創業者の思い

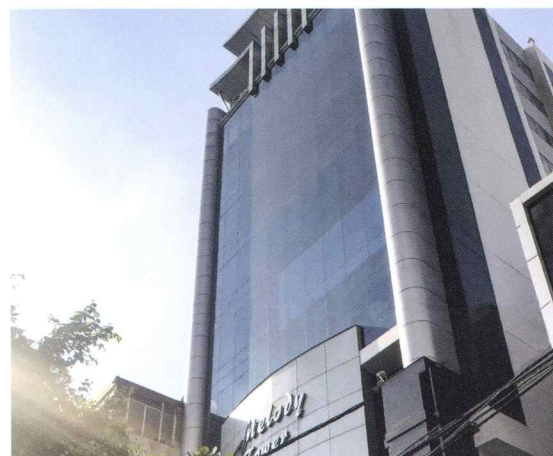
株式会社横山工業所は、自社の発展と同時に、設備業界全体の発展に寄与したいと考えています。その一つが「アカデミー構想」です。日本の、あるいは海外からの若い人たちに対して、設備に携わる仕事の技能を教える「育成の場」。これを株式会社横山工業所傘下の組織として作ることを目指しています。業界として現存する指導のシステムは、残念ながら社業との兼ね合いもあり、決して満足いく体制がありません。育成に特化したアカデミーを整備し、情熱をもって取り組むことが真の人材育成につながるものだと考えます。この育成システムとこれからの仕事をどう結び付けるか。当社が2020年、ベトナムに開設するCADセンターが、その方向性を示す第一歩になります。

なぜ、ベトナムなのか

私たちは、2020年9月、ベトナムにCADセンターを開設します。日本の9割ほどの国土に、1億人に迫る人口を抱えるこの国は、近年、日本への留学生数の急増に象徴されるように、人材が豊富で、彼らの根

底にある「国を良くしたい、暮らしを良くしたい」という強い思いから、技術習得にも熱心です。高いITリテラシーを背景に、優れた技術者を多く輩出し、CADの水準が非常に高い国でもあります。視察を重ねるなかで、現在は高度な技術者が、中国よりベトナムに集まる傾向は顕著で、私たちの仕事に必要なCADの分野で急速に伸びている国です。

日本ではまだ少ないBIM（ビルディング インフォメーション モデリング）と呼ばれるワークフローによって、立体的で工期とコストが全部設計に盛り込まれるシステムにおいても、日本よりもはるかに進んでいるのが現状です。これらの理由から、ベトナムは有能なエンジニアを獲得しやすい環境にあるといえます。



発展を続けるホーチミン市の街並み

発展の可能性を追求する

この計画のスタートは、2年半ほど前、一人のベトナム人エンジニアとの出会いに遡ります。13年前、日本語もわからないまま来日し、苦勞しながら構造設計を学んだ男性です。意欲的に母国での開業を目指す彼の存在と、当社で技術習得を目指す技能訓練生の将来像が一本の線でつながったことで、構想が動き出しました。

ベトナムは、都市圏の近代化が進む一方で、国全体でのインフラ整備は遅れており、身に付けた技術を、彼らが直接母国で売って仕事をする段階にはまだありません。そこで、社員とスキルだけを資産に、オフィスを構えることにしました。仕事のやり取りは、インターネットのツールを利用してブラッシュアップを重ね、完成形に近づけていく作業をします。現在当社で内製化できている業務を、ベトナムのオフィスとも繋げて行うことをイメージしています。

現在は、現地でのリクルート活動を終え、社員は日本語を勉強中です。来年3月にはオフィスの登記を終え、5~6人体制でのスタートの予定です。将来的には、広島とベトナムで人材交流する時代が来ることや、ベトナム法人が大きく成長する可能性もあります。日本のクオリ

ティが本当に必要とされる仕事につながるには、まだ時間を必要としますが、やがては私たちの技術をベトナムの建設現場で活かすことが出来るようになるでしょう。

成長のためにリスクを恐れず

新しいことを始めるには、当然リスクを伴うものですが、成功の可能性は、挑戦なくして生まれません。創業家が傾けた技術者の育成をこれからの株式会社横山工業所の使命とし、業界全体に貢献できる新たな仕事の形を実現していきます。



現地での面接風景



社員一言メッセージ

大ベテランからピカピカの新人まで
創業50年の節目に揃った横山工業所の精鋭たち。



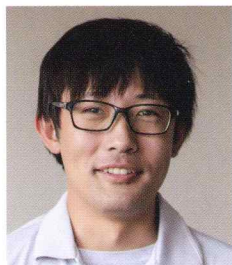
近本 智
2019年入社 工務部
会社が還暦を迎えることのできるよう尽力していきます。



曾我 夢人
2019年入社 工務部
関わる人達に感謝し、これからも仕事をしていきたいです。



栗原 幸希
2019年入社 工務部
節目の年に入社できて光栄です。先輩方と共に頑張ります。



白川 涼夏
2019年入社 工務部
早く一人前になれるように、頑張ります。



グエンドック クイ
2019年入社 工務部
仕事を頑張る。日本語をもっと上手になりたいです。



チャン ヴァン ヒエップ
2019年入社 工務部
仕事を頑張る。日本語をもっと上手になりたいです。



レバン ティエン
2018年入社 工務部
会社に入って、皆さんから熱心に教えてもらって幸せです。



小川 竜太
2018年入社 工務部
これまでの歴史に負けないような未来を築いていきます。



西道 亜耶
2018年入社 営業部
50年の歴史がもっと輝くように全力で頑張っています。



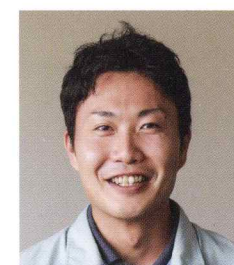
天野 翼
2018年入社 工務部
若き力を存分に発揮して頑張ります！



西岡 高寛
2015年入社 営業部
たくさんのご縁と感謝を忘れずに、めざせ100周年！



藤田 恭平
2015年入社 工務部
これからの歴史の一部になれるよう頑張ります。



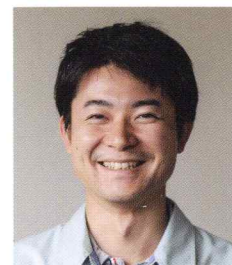
佐藤 宏樹
2014年入社 工務部
仕事と家庭、気持ちの切り替えをして頑張ります。



谷合 正幸
2014年入社 営業部
歴代の諸先輩方に感謝し、新たな歴史を築いて参ります。



野上 佳奈
2014年入社 工務部
感謝の気持ちを忘れず、歴史に負けないよう頑張ります。



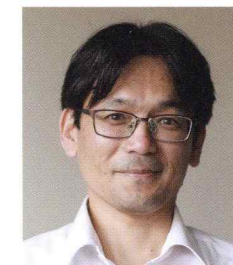
岡田 健史
2013年入社 工務部
次世代を担い、これからも「楽しく」をモットーに頑張ります！



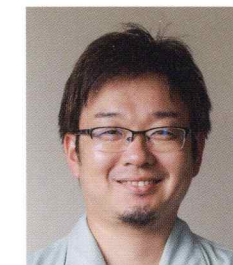
藤縄 一
2011年入社 総務経理部
50年の大きな節目を迎え、更なる発展に向け精進致します。



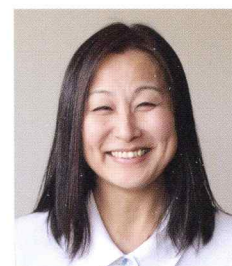
青木 洋人
2007年入社 工務部
「縁」があり、今の自分がある。「家族」を大事にします。



宮下 正男
2007年入社 営業部
長い年月をかけて築きあげた信用を皆で守っています。



中尾 登
2005年入社 工務部
山あり谷ありだとは思いますがこれからも頑張っていきます。



田中 千津子
2004年入社 工務部
広島一、日本一、世界一、宇宙一の会社になるよう頑張ります！



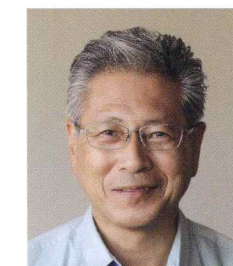
藤井 真奈美
1999年 工務部
先輩方の功績に感謝を忘れず、新たな分野を築いていきます！



小倉 規次
1998年入社 工務部
今後も頑張っていきます。



高橋 弘史
1996年入社 工務部
日々の努力で技術の向上を目指して頑張ります。



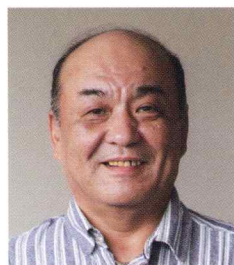
齋藤 靖浩
1993年入社 工務部
温故知新の精神で参ります。



藤縄 恭平
2018年入社 総務経理部
努力を重ね、会社に貢献していきます。



ダーン アントゥアン
2017年入社 工務部
日本で仕事を覚え、ベトナム支店計画に向けてチャレンジします。



中島 克治
2017年入社 工務部
一日一日を有意義な時間になりたい。



横田 夏希
2017年入社 工務部
50周年おめでとう。これからも年を重ねましょう。



山本 廉
2017年入社 工務部
立派な現場代理人になれるよう頑張ります。



石井 宏
1992年入社 工務部
日々努力し、素直な心で反省を繰り返し精進していきます。



小方 逸司
1991年入社 工務部
更なる50年へ！企業成長をする為の礎を築けるように貢献する。



久保河内 久
1991年入社 工務部
この大きな節目に在籍していたことを誇りに思います。



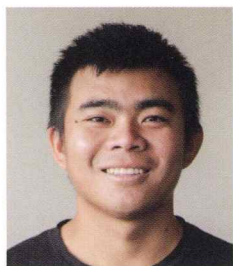
鵜野 節子
1990年入社 営業部
平成の年月、躍進する横山の一員でいられたことに感謝いたします。



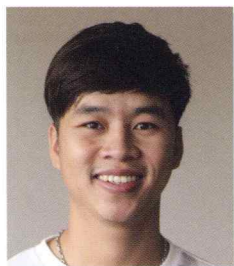
松下 須美子
1988年入社 総務経理部
今日まで歴史を築いてきた方々に感謝しつつ一層仕事に専念します。



長沼 誠治
2017年入社 工務部
明るく元気を出して仕事に取り組みたいと思います。



チャン ヴァンドック
2016年入社 工務部
自分にとって横山工業所はNO.1。いくら大変でも頑張ります。



ファム ドウック ギャ
2016年入社 工務部
会社に戻ってくる時、もっと頑張ります。



畝尾 和幸
2016年入社 工務部
時代の変化に対応し、歴史に恥じない物作りを心掛けます。



久富 大聖
2016年入社 工務部
目標意識と成長意欲を常に持ち続けて頑張ります。



永岡 治利
1988年入社 設計部
記念の年に在籍できることに感謝、今後も精進します。



横山 悦明
1985年入社 工務部
昔は辛かったけど、今となっては良かったと思います。ありがとうございます。



高石 寛
1984年入社 営業部
入社して早35年、初心に戻って頑張ります。



藤井 貞二
1980年入社 工務部
気付けばベテラン、大事な緑の下の力持ちであれ。

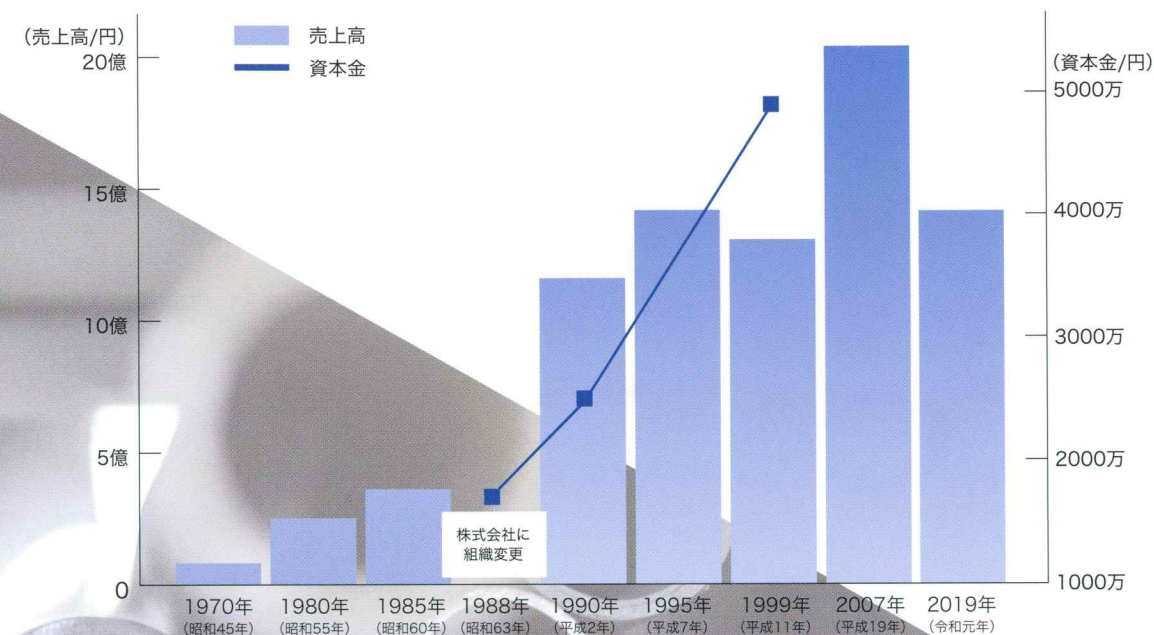


森山 能男
1977年 統括本部長
50年の歴史を誇りに次への架け橋を築いていきます。皆様へ感謝。

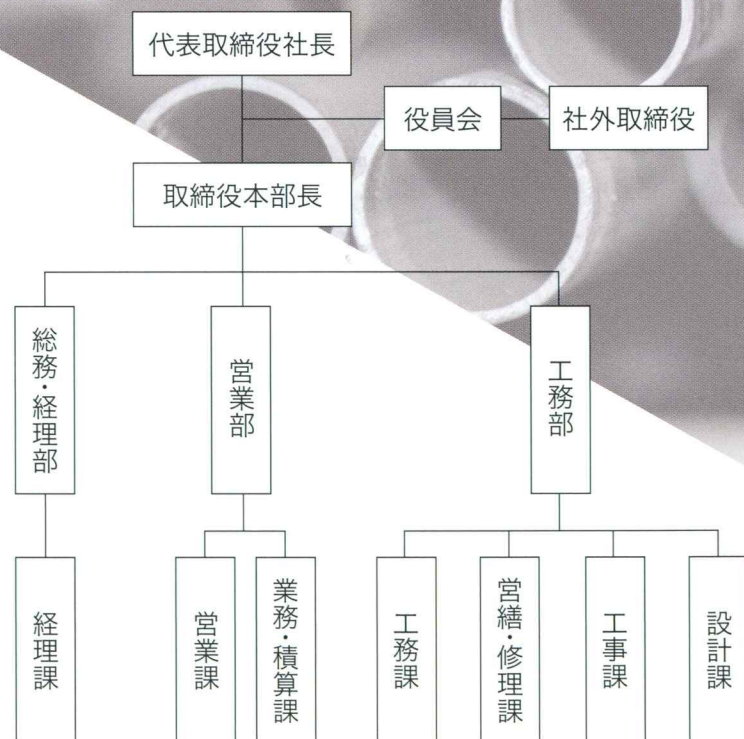
会社概要

社名 株式会社横山工業所
 所在地 〒732-0817 広島県広島市南区比治山町1-10
 電話番号 082-264-2291
 FAX番号 082-264-2286
 代表者 代表取締役社長 横山典玄
 設立 創業：昭和40年10月 設立：昭和44年11月
 資本金 49,000,000円
 従業員数 45名

資本金 / 売上高推移



組織図



業務内容

空調・給排水など空調衛生の施工を通して、暮らしを支えています。

- 衛生関係 給水設備、排水設備、衛生設備、ガス設備
- 防災関係 消火配管設備、スプリンクラー消火配管設備、その他特殊消火配管設備
- 空調関係 空調設備、熱源機設備、換気設備、ダクト配管設備
- リニューアル関係 マンション、オフィスビル、施設、病院
- リフォーム関係 キッチン、お風呂、洗面脱衣、トイレ
- メンテナンス関係 修繕工事、保守工事、管理工事

横山工業所オフィシャルサイト <https://yokoko.net/>
 リクルートサイト <https://recruit.yokoko.net/>

1990年(平成2年)
 新社屋完成当時のイメージパース



横山工業所50年の歩み

2019年11月15日 発行

発行者 株式会社横山工業所

印刷所 東光印刷株式会社